

地域が主役 パワーみなぎる

語り継ぐ淀川

タウン誌「ザ・淀川」編集長

乃美夏絵さん (29)

阪急十三駅の東側。住宅密集地の小さな一軒家に編集部を構える。

地元タウン誌「ザ・淀川」が今年5月で創刊30年を迎えた。淀川の右岸、大阪市淀川区全域の約9万世帯をカバーする月刊のフリーペーパーだ。

カラー刷りの40ページに、地域情報が満載。旅案内、俳句・川柳のほか、エネルギー問題などのトピックス、海外リポート、行政通信、若者の主張……など骨っぽい内容も並ぶ。ありがちな「広告べったり」とは一線を画し、平成元年のタウン誌全国フェスティバルでは奨励賞を受賞している。

編集長の乃美夏絵さんは淀川左岸の北区在住で、入社7年目。編集長とはいえず、女性ばかり5人の所帯だけに取材・編集・広告など休日返上で

何でもこなす。

「淀川近辺は人にパワーがあったて、記事に困ることはないという感じですね。河川敷、繁華街、民家、工場、物づくり……とにかく街がカラフルなんです。それに区民にとって、河川敷に座ってしゃべったり、たたずんだりするのは人生ですごく大事な時間なんです」

乃美さんは海外でルポライターとして仕事をすることを夢見ていた。ところがある時、自宅に配られた「ザ・淀川」の姉妹誌に衝撃を受けた。「いつも見ていた八百屋のおっちゃん、こんなオモロイ経歴やったんや」。外国でなくても、地域に魅力的な場所や人物はたくさんある。すぐに編集部で電話を入れた。

この時、「遊びにおいでよ」と声をかけてくれたのが、初代編集長の南野佳代子さん。大阪市民表彰など数々の賞を受賞する名物編集者だ。

「お母さんみたいな人でしたね。興味を持っていてくれる人や場所を自由に取材させてくれました。原稿は跡形なく直されてはっかりでしたが、『この子、この仕事が好きなんやろなあ』とでも思ってくれはったんでしようね。本当にかわいがってくれました」

取材・編集活動が軌道に乗り始めたころ、南野さんから「創刊30年を機に、私は顧問になるから、よかつたら編集長やってくれへんかなあ」と言われた。この時は「そうなるよ、一生懸命勉強します」とだけ答えただけ。だが、その時期は思いのほか早く

訪れた。平成21年9月15日、南野さんは64歳で逝去。10年来、がんとの闘病が続いていたのだ。

乃美さんらに休刊する気はなかった。編集長に就くと、翌年、南野さんの事務所から現在の場所に移転。再スタートを切った。

「近所の飲食店主さんとかも『ここでやめたら、佳代子が泣くぞ』と応援してくれました。まだまだ地域情報誌というのは大事ななやと思いましたが」

経営が苦しく1度だけ休刊したが、それ以外は減ページで乗り切った。現在も決して楽ではないが、周囲のバックアップで発行を続けている。

「また、南野さんのイメージが強いですが、最近ようやく『編集長』と声をかけていただけになりました。地域が主役。南野さんの思いを継いで、気楽な中にも、おっと思えるような記事を織り込みたいですね」

(豊田昌継)

「淀川は、地元の人たちにとって大切な川なんですよ」と語る乃美夏絵さん—大阪市淀川区



「ザ・淀川」 昭和56年5月創刊。大阪市淀川区の全世帯、商店などに個別配布している月刊のフリーペーパー（毎月25日発行）。平成元年、第5回NTT全国タウン誌フェスティバル「タウン誌大賞奨励賞」を受賞。発行部数9万部。カラーB5判変形40ページ。

反り